View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

Annual Bulletin of Institute of Psychological Studies.
Showa Women's University, 2012, Vol. 14, 31-40.

論　文

手書き文字の感性印象と筆跡から推測されたおよび実際の書き手のパーソナリティ特性との関連について[1)]

松野　隆則

Actual and inferred relationships between impressions about handwriting and the writer's personality

Takanori MATSUNO

Handwriting samples of a given Japanese text were collected from female student participants (N=50). Affective impressions regarding the appearance of the handwriting samples were assessed using the Semantic Differential technique. A factor analysis revealed three dimensions of impressions about handwriting, which were semantically similar to the dimensions of person perception. Another panel of female students inferred the big-five personality traits of the writers from the handwriting samples. All inferred personality traits were moderately or strongly correlated with at least one dimension of the impressions about handwriting. However, there were no statistically significant correlations between the dimensions of impressions about the handwriting and the writer's actual personality traits as assessed by the Big-Five Scales. The process and the fallaciousness of naïve graphological inferences are discussed.

Key words : handwriting（筆跡）, personality traits（パーソナリティ特性）, person perception（対人認知）, semantic similarity（意味的類似性）, naïve graphology（素朴筆跡学）

問　題

「字は人なり」という言葉に聞き覚えはないだろうか。親しい人から届いた肉筆の便りの文字にその人らしさを感じて懐かしく見入ってしまう。慶弔時の記帳の際に後続客や相手先に見られることになる自分の悪筆を見て恥ずかしく思う。これらは日常生活の中で、手書き文字を見る際にそれを書いた人自身に関する何かをわれわれが感じていること示す例であろう。

筆跡学への懐疑

手書き文字の筆跡にそれを書いた人の人となりが表われるという信念は洋の東西を問わず見られるが、欧米では筆跡学（graphology）といわれる体系が発展し、筆跡から読み取られる文字の大きさや傾き、書字速度や筆圧、連続線のパターンなどの特徴に基づいて書き手の性格や能力・適性等についての判断が可能であると主張されており、フランスでは控え目な推計でも３分の１以上の企業や団体が筆跡学を応用した人事配置や採用を行っているという指摘もある（King & Koehler, 2000）。

ところが近年の心理学的研究においては、筆跡の特徴と書き手のパーソナリティとの関連を否定する報告が相次いでいる（Furnham, Chamorro-Premuzic, & Callahan, 2003; Dazzi & Pedrabissi, 2009）。筆跡学的な推測に関する200本以上の実証研究のメタ分析（Dean, 1992）でも、関連ありとする研究には方法論的欠陥を伴うものが多く、書字内容を統制した研究に限定すると筆跡特徴とパーソナリティとの関連の効果サイズの推定値は非常に小さかったため、筆跡学の科学的なエビデンスについて疑問が投げかけられている。

筆跡からのパーソナリティ認知

筆跡学の知見が妥当であろうがなかろうが、筆跡学者以外の一般の人々も筆跡から書き手のパーソナリティに関する情報を読み取ろうとしていることは疑いない。例えばVine（1974）は、12人分の筆跡を63人の評価者に提示して内向－外向性と神経症傾向に関して順位づけさせたところ、どちらの尺度においても評価者間の判断の一致は高かった。評価者たちは、筆跡の何らかの同じ特徴を手がかりにしてこれらの2つのパーソナリティ特性について判断していたわけである。ただし、筆跡からの順位づけ判断と筆記者の実際のパーソナリティ検査の結果との対応は低かったため、Vineはこれらの判断が妥当性の低いステレオタイプの反映であると主張している。

それでは筆跡の特徴と書き手のどのようなパーソナリティが対応して認知されるのであろうか。対人認知の研究は、人々が限られた情報から対象となる人物のパーソナリティの全体的印象を形成することを明らかにしてきた。顔つきや発話を手がかり情報としたそのような研究は数多く存在し、顔の相貌的特徴や発話の音響学的な特徴が、対象人物のパーソナリティ認知にどのような影響をもたらすかが明らかになってきている（Brown, Strong, & Rencher, 1973; Shepherd, 1989）。しかし、パーソナリティ認知において筆跡を手がかりとした研究は容貌や発話などを手がかりとするものと比べ極端に少ない。Warner & Sugerman（1986）も指摘しているように、おそらくは筆跡学とあまりにも類似した研究となってしまうため、パーソナリティ認知の手がかりとしての筆跡に心理学的関心を向けることは避けられているようである。WarnerとSugermanは刺激人物の外見や発話や筆跡を手がかりとしてパーソナリティ特性を推測させる実験研究を行い、筆跡を手がかりとした場合には外見や発話を手がかりとした場合とは異なり、刺激人物の印象が「強い」「優越した」等の力量性次元を中心として弁別されていたことを報告している。ただしWarnerとSugermanの研究でも、手がかりチャネルの違いに焦点が当てられており、どの筆跡特徴がそのような認知に結びつくかについては述べられていない。筆跡学の影が災いし、人々の持つ「暗黙のパーソナリティ理論」（Bruner & Tagiuri, 1954）における筆跡と関わる側面は、十分には明らかになっていないと思われる。

日本での展開

日本語は漢字かな混じり文という、欧米語のアルファベットとは全く異なった表記システムを持つ言語である。また日本においては筆跡学を巡る事情も欧米圏とは異なるため、筆跡とパーソナリティとの関連についての研究は独自の展開を示す余地があると思われる。

日本では、筆跡学の伝統の上に科学的方法による実証的研究を重ねた心理学者たちによって、筆跡と書き手のパーソナリティとの関連が検討されてきた（黒田, 1980；槇田, 1983；槇田・小谷津・伊藤・渡辺・平野, 1981）。これらの研究においては筆跡の形態的特徴と、クレッチマー（Kretschmer, 1921）やイェーンシュ（Jaensch, 1930）の類型論に基づいて査定された書き手のパーソナリティとの関連が繰り返し報告されている。

一方、パーソナリティの査定に特性論的な質問紙検査を使用した比較的新しい研究では、一般の人々が筆跡を手がかりとして書き手のパーソナリティを認知する傾向の存在が確認されるものの、筆跡と実際のパーソナリティとの関連については否定的である。

西園・無藤（1993）は、50名（男女各25名）の大学生を対象としてYG性格検査を実施するとともに録音文書の聞き書きと清書の筆跡を採取し、これを35名の大学生に観察させて、字の印象を評定させるともに書き手の性格についてYG性格検査での性格特性に関して推測させた。学会発表抄録のため研究の詳細は不明な点もあるが一連の結果から、「性格と書字の特徴との対応は乏しい」「多くの人は、書字に性格特性を感じる」という結論が示されている。

書写教育の観点から行われた塩田・田中・押木（1998）による研究もほぼ同様の結論を得ている。塩田らは、書写指導の目標設定に資するために、「筆跡と性格は関係があるか」および「筆跡によって書き手の性格はどのように想像されるか」という2つの問題を立て、大学生を対象とした実証的な調査研究を行った。塩田らはまず、大学生58名（男女各29名）にYG性格検査を実施するとともに100文字程度の文章を筆記させて、性格検

査結果と対応づけられた筆跡サンプルを収集した。そして、これらの筆跡サンプルを大学生49名に提示して各サンプルについて、「文字から受ける印象」を別に行なわれた調査で開発した12項目のSD尺度で評定させるとともに、筆跡から想像される書き手の性格をYG検査結果の５類型のいずれかに分類させている。サンプル提供者のYG検査判定結果と筆跡から想像された性格類型との全体的一致率が27.0％であったことなどから、塩田らは「今回の分析からは、筆跡から筆者の性格を想像できるとは言えない」と結論づけ、留保つきながら筆跡と実際の性格との関連を否定している。これに対し、筆跡印象のSD評定と筆跡から想像された性格の類型判断との間に中程度以上の相関が見られ、筆跡から受ける印象と想像される筆者の性格はおおいに関係があるとされた。因子分析の結果得られた「整斉系」「丸柔系」「伸々系」と名付けられた筆跡から受ける印象の３因子のうち、「整っている－くずれている」等の「整斉系」因子に属する項目や「のびのびした－こぢんまりした」等の「伸々系」因子に属する項目のいくつかが、Ａ（平均）型以外の４つのYG性格類型への想像された分類判断と結びついていることが示された。

本研究の目的

本研究は、塩田ら（1998）の作成した尺度を用いて手書き文字の感性印象を測定し、人々が筆跡を手がかりとして書き手のパーソナリティ特性をどのように推測するかを実証的に明らかにしようとするものである。また同時に書き手の実際のパーソナリティの査定を行ない、筆跡からのパーソナリティ特性の推測的認知が事実と一致するかどうか、すなわち筆跡からのパーソナリティ認知の妥当性について検証することも目的としている。

本研究では、実際のおよび筆跡から推測された書き手のパーソナリティを、YG性格検査や類型論による分類ではなくパーソナリティの包括的な特性論的理解であるビッグファイブ理論に基づく査定方法を用いて、多面的かつ計量的に測定する。これによって、手書き文字の感性印象のどのような次元が書き手のパーソナリティ特性に関するどのような推測と結びついているかを、より詳細に検討することが可能となっている。また、そのような結びつきが事実と合致するかどうかを、書き手の実際のパーソナリティ特性との結びつきと照合することによって、より綿密に検証することも可能となっている。

また、塩田ら（1998）の研究では、男女大学生から採集した筆跡サンプル全体を混合して提示し、印象や想像される性格の評定を行なわせていた。一般の人が筆跡から書き手の性別をある程度正しく判断できることが英語とウルドゥ語で確認されている（Hamid & Loewenthal, 1996）が、日本語においても同様だとすると、書き手の性別が手書き文字の形態や印象に系統的な差違をもたらしていると考えられる。したがって研究の実施においてはパーソナリティ特性による変動と性別に由来する変動の混淆を避ける手続きをが必要である。調査サイズの制約から本研究では筆跡サンプル提供者の性別を女性に限定して調査を行うこととした。また筆跡の評定者の性別も、普段から同性の筆跡を観察する機会が多いと考えられる、女性とした。

方　法

調査Ｉ　筆跡サンプルの採取と書き手のパーソナリティ特性の査定

参加者　首都圏の大学に通う女子大学生50名。年齢の平均は19.7歳、範囲は17～24歳であった。

調査時期　平成20年７月～８月

手続き　無記名の自記式質問紙による調査を実施した。大学の講義室等で授業時間外に居合わせた学生に協力を打診し、応諾した場合に質問紙を手渡し配布し、持ち帰って記入した上で大学構内に設置した回収ボックスへ投函するよう依頼した。また質問紙配布の際に、調査への参加の謝礼も兼ねて黒色インクのボールペンを渡し、そのボールペンを使用して質問紙に記入回答するよう求めた。

材料　質問紙はA４判のコピー用紙に印刷され、調査の倫理的配慮を記したフェイス・シート、性格検査、筆跡サンプル採取用紙の順に綴じられていた。性格検査には和田（1996）のBig Five尺度を使用し、性格特性を示す60語の形容語に関して自分自身への当てはまりの程度を、まったく当

てはまらない～非常に当てはまるの７段階で答えるよう求めた。筆跡サンプルの採取では、用紙上部に刺激文として夏目漱石の『吾輩は猫である』（新潮文庫版）の冒頭88文字を明朝体縦書き（各行10文字で10行）で提示し、用紙下部に設けられた横書きの罫線（10mm幅7行）に刺激文をボールペンで書き写すよう求めた。

調査Ⅱ　「筆跡から受ける印象」および「筆跡から想像される性格」の評定

参加者　首都圏の大学に通う女子大学生72名。ランダムに割り振られた半数の36名ずつが、「筆跡から受ける印象」または書き手の「筆跡から想像される性格」のどちらか一方の評定に参加した。参加者の平均年齢は20.8歳、年齢の範囲は19～22歳であった。

調査時期　平成20年10月～12月

手続き　大学での授業時に調査への参加協力の依頼用紙を配布し、協力を承諾してくれた回答者に日程を連絡して調査会場に集合してもらった。調査会場はパーティションで区切られた個別座席ブースのある集団実験室で、１回に２～７人の小グループごとに集合調査の形式で実施した。参加者は、所要時間に関する説明を口頭で受けた後、後述する16種類の自記式質問紙のうちランダムに割り当てられたどれか１部が配布され、セルフペースで記入回答するよう求められた。調査開始後は参加者間の相互作用は禁止され、参加者は自分の回答が終了次第、各自調査会場から退室した。所要時間の目安は20分間としたが、参加依頼時に予告した30分間を超える回答時間を要した参加者はいなかった。

材料　調査Ⅰで採取された筆跡サンプル50名分を刺激として、「筆跡から受ける印象」を調査する質問紙および「筆跡から想像される性格」を調査する質問紙を作成した。ただし、参加者の負担を考慮し、各質問紙は50の筆跡サンプルを半数の25名分ずつに分割して作成された。筆跡サンプルの分割は２通りの基準で行われ、採取順に割り振られたサンプル番号の前半・後半または奇数・偶数によって分割されて、４種類のサブサンプルが構成された。また提示順序による影響を相殺するため、各質問紙におけるサンプルの提示順序を、サンプル番号の昇順と降順の２通り設けた。その結果、測定内容２×サブサンプル４×提示順序２の16種類の質問紙が構成された。

各質問紙はA4判のコピー用紙に印刷され、調査の倫理的配慮を記したフェイスシートに続いて、筆跡サンプルと回答尺度を上下に配した評定用紙が25枚綴じられていた。「筆跡から受ける印象」の評定では、塩田ら（1998）の用いた12対の形容語（「きたない－きれい」、「整っている－くずれている」、「字が大きい－字が小さい」、「角ばっている－丸い」、「ていねい－乱雑」、「弱々しい－力強い」、「男性的－女性的」、「読みやすい－読みにくい」、「暗い－明るい」、「かわいい－かわいくない」、「のびのびした－こぢんまりした」、「かたい－やわらかい」）を使用し、12項目７件法のSD尺度評定で回答を求めた。これらの形容語はいずれも、書き手についてではなく手書き文字そのものに関して、その形態的特徴から観察者が受ける感性的な印象を記述する語であると判断されたため使用した。また、「筆跡から想像される性格」の評定では、和田（1996）および辻（1998）を参考に選定した各因子２対の性格特性語（外向性因子：「話し好き－無口な」「社交的－無愛想な」、情緒不安定性因子：「悩みがち－くよくよしない」「心配性－マイペース」、開放性因子：「想像力に富んだ－想像力に乏しい」「進歩的－保守的」、誠実性因子：「勤勉な－いい加減な」「計画性のある－成り行きまかせ」、調和性因子：「温和な－怒りっぽい」「親切な－自己中心的」）を２対ずつ併記して示し、５項目７件法のSD尺度評定で回答を求めた。

結　果

調査ⅠのBig Five尺度への回答からは、和田（1996）に従って５つの下位尺度得点が算出された。これらを筆跡サンプルの書き手の「実際の性格」と考え、「実際外向性」得点、「実際情緒不安定」得点、「実際開放性」得点、「実際誠実性」得点、「実際調和性」得点とした。

調査Ⅱは、すべての評定回答を＋３～－３に得点化した後、筆跡サンプルごとに各項目18名分の評定の平均値を算出した。「筆跡から想像される性格」の各項目の平均値は、そのまま各筆跡サンプルの書き手の「想像外向性」得点、「想像情

緒不安定」得点、「想像開放性」得点、「想像誠実性」得点、「想像調和性」得点とされた。「筆跡から受ける印象」の各項目の平均値には以下の分析を施した。

手書き文字の感性印象の因子分析

手書き文字の感性印象を記述する次元を定めるために、筆跡サンプルをケースとして、「筆跡から受ける印象」の12項目に関して因子分析を行った。因子抽出法を主因子法、因子軸回転法をヴァリマクス法として探索的に検討したところ。スクリー・テストと因子の解釈可能性から3因子解が採用された（累積寄与率87.3％）。因子軸回転後の各項目の因子負荷量を表1示す。

第1因子は絶対値が0.6以上の負荷を示した評定項目が4項目あり、「整っている・きれい・ていねい・読みやすい」か「くずれている・きたない・乱雑・読みにくい」かを中心とする因子であった。均一に整った文字に感じる美的・認知的な快と、不揃いで崩れた文字に感じる美的・認知的な不快を両極とする印象次元と解釈できたため、「文字の均整さの快不快」と命名した。

第2因子も絶対値が0.6以上の負荷を示した評定項目が4項目あり、「やわらかい・かわいい・女性的・丸い」か「かたい・かわいくない・男性的・角ばっている」かを中心とする因子であった。曲線的な丸い字形に感じる柔和な親和感と、直線的な角ばった字形に感じる堅苦しい中立感を両極とする印象次元と解釈できたため、「字形の丸さの親和感」と命名した。

第3因子も絶対値が0.6以上の負荷を示した評定項目が4項目あり、「のびのびした・字が大きい・明るい・力強い」か「こぢんまりした・字が小さい・暗い・弱々しい」かを中心とする因子であった。大きな文字に感じるのびのびとしたスケール感と、小さな文字に感じる委縮した非力感を両極とする印象次元と解釈できたため、「文字サイズのスケール感」と命名した。

各因子に絶対値0.6以上の高い負荷を示した各4項目の得点を、因子のラベルとした方の極の内容を表わす方向に揃えて合計して、「文字の均整さの快不快」得点、「字形の丸さの親和性」得点、「文字サイズのスケール感」得点を筆跡サンプルごとに算出した。これら3つの感性印象得点間の積率相関係数は、「文字の均整さの快不快－字形の丸さの親和性」で-0.04、「文字の均整さの快不快－文字サイズのスケール感」で0.45、「字形の丸さの親和性－文字サイズのスケール感」で-0.42であった。

手書き文字の感性印象と「筆跡から想像される性格」および「実際の性格」との相関と差

手書きの文字の感性印象と、書き手の「筆跡から想像される性格」や「実際の性格」のパーソナリティ特性との関連を検討するため、筆跡サンプルをケースとして積率相関係数を算出した（表2）。

表1　手書き文字の感性印象の因子分析結果（主因子法ヴァリマクス回転後の因子負荷）

評定尺度項目	第1因子	第2因子	第3因子	共通性
整っている－くずれている	**0.944**	0.099	0.251	0.965
きたない－きれい	**-0.942**	0.017	-0.149	0.910
ていねい－乱雑	**0.925**	0.054	0.080	0.866
読みやすい－読みにくい	**0.874**	-0.079	0.383	0.916
かたい－やわらかい	0.198	**0.904**	-0.014	0.857
かわいい－かわいくない	0.215	**-0.862**	-0.157	0.813
男性的－女性的	-0.191	**0.816**	0.214	0.749
角ばっている－丸い	0.236	**0.786**	0.145	0.694
のびのびした－こぢんまりした	0.164	0.222	**0.927**	0.936
字が大きい－字が小さい	0.205	0.409	**0.845**	0.923
暗い－明るい	-0.312	0.377	**-0.803**	0.884
弱々しい－力強い	-0.266	-0.506	**-0.800**	0.967
寄与率	31.78	28.99	26.56	

表 2　手書き文字の感性印象と「筆跡から想像される性格」や「実際の性格」との相関およびその差

手書き文字の感性印象	パーソナリティ特性（上段：筆跡から想像される性格、下段：実際の性格）				
	外向性	情緒不安定性	開放性	誠実性	調和性
文字の均整さの快不快	0.06 -0.10	-0.01 0.07	0.04 -0.03	0.74 ** 0.15 **	0.67 ** 0.10 **
字形の丸さの親和感	0.35 * 0.08	-0.19 0.05	0.23 -0.12	-0.21 0.03	0.46 ** -0.07 **
文字サイズのスケール感	0.44 ** -0.12 **	-0.55 ** 0.10 **	0.50 ** 0.01 *	0.03 0.05	-0.05 -0.20

*　相関係数または相関の差が５％水準で有意（両側検定）　　（N＝50）
**　相関係数または相関の差が１％水準で有意（両側検定）

「筆跡から想像される性格」（表２の各セル上段）においては、パーソナリティ特性と手書き文字の感性印象次元との15通りの組み合わせのうち、7か所において統計的に有意な相関が認められた。５つのパーソナリティ特性すべてにおいて手書き文字の感性印象次元のどれか１つ以上と中程度以上の相関がみられ、感性印象の３次元もすべて複数のパーソナリティ特性との相関が有意であった。

「文字の均整さの快不快」の印象は「想像誠実性」や「想像調和性」と強い正の相関があった。「字形の丸さの親和感」の印象は「想像調和性」と中程度の正の相関、「想像外向性」とは弱い正の相関があった。「文字サイズのスケール感」の印象は、「想像外向性」や「想像開放性」とは中程度の正の相関が、「想像情緒不安定」とは中程度の負の相関があった。

しかし「実際の性格」（表２の各セル下段）においては、５つのパーソナリティ特性はいずれも、手書き文字の感性印象と統計的に有意な相関を示さなかった。また、表２の各セルの上下の相関係数の差、すなわちパーソナリティ特性と手書き文字の感性印象次元の各組み合わせにおいて、感性印象との相関が「筆跡から想像される性格」と「実際の性格」の間で差がないかを検討した。共有変数を持つ相関係数の差の検定の結果を表２の各セルの左側に示す。「字形の丸さの親和感」と「外向性」との相関における差を除き、「筆跡から想像される性格」におけるパーソナリティ特性と手書き文字の感性印象との相関が１％水準で有意だったセルはどれも、「想像」と「実際」の相関係数の差も統計的に有意であった。手書き文字の感性印象と「実際の性格」の各パーソナリティ特性との間に確たる結びつきはまったく存在せず、手書き文字の感性印象と「筆跡から想像される性格」の各パーソナリティ特性との間に見られた相関は、そのほとんどが感性印象とパーソナリティ特性との「実際」の相関とは、大きさまたは方向性において異なるものであった。

「実際の性格」と「筆跡から想像される性格」との相関

筆跡提供者の「実際の性格」と「筆跡から想像される性格」との関連を検討するために、筆跡サンプルをケースとして、双方のパーソナリティ特性間の積率相関係数を算出した（表３）。

相関行列の対角要素である、同一のパーソナリティ特性における「実際」と「想像」の相関係数は、外向性においてはほぼゼロ、情緒不安定性および開放性においては負の値を示した。また誠実性および調和性においては0.2前後の正の値であったが、いずれも統計的に有意ではなかった。筆跡から推測された書き手のパーソナリティ特性の個人差は、同じ特性における書き手の実際の個人差とほとんど一致しないと言えよう。

統計的に有意な相関が認められたのは「実際調和性」と「筆跡から想像される性格」のパーソナリティ特性との間だけであり、「実際調和性」は

表 3　「筆跡から想像される性格」と「実際の性格」との相関

	想像外向性	想像情緒不安定	想像開放性	想像誠実性	想像調和性
実際外向性	**0.06**	0.01	0.02	0.00	0.01
実際情緒不安定	0.17	**-0.16**	0.11	-0.16	-0.06
実際開放性	-0.23	0.14	**-0.09**	0.10	-0.12
実際想像性	-0.10	0.06	0.00	**0.18**	0.08
実際調和性	-0.31*	0.37**	-0.20	0.34*	**0.22**

*　相関係数が５％水準で有意（両側検定）　　（N=50）
**　相関係数が１％％水準で有意（両側検定）

「想像外向性」との間で弱い負の相関を示し「想像情緒不安定」および「想像誠実性」との間で弱い正の相関を示した。書き手の実際の「調和性」は、筆跡サンプルに、感性印象の３次元では十分に捉えきれない系統的な差異をもたらし、筆跡の観察者はその差異を書き手の「外向性」や「情緒不安定性」や「誠実性」に関わる兆候として認知していたことになる。

考　察

手書き文字の感性印象の次元

今回の調査結果からは、筆跡サンプルごとの平均印象の因子分析により、手書き文字の感性印象を記述する３つの次元の存在が確認された。これらの次元は、それぞれに高い因子負荷を示した形容語の記述から、手書き文字の形態的特徴の感知とその特徴に感じる情緒的印象の複合体として解釈することが可能であり、「文字の均整さの快不快」、「字形の丸さの親和感」、「文字サイズのスケール感」と名付けられた。以上によって、一般の人々が手書き文字の筆跡を見た際に受ける感性印象の構造と内容が明らかになったといえよう。

興味深いのは、本研究で抽出された手書き文字の感性印象の３次元が、対人的な認知の枠組みと類同性がある点である。林（1978）を始め日本における対人認知の研究で繰り返し確認され、対人認知の基本３次元として知られる「社会的望ましさ」「個人的親しみやすさ」「力本性」は、意味的な類似性によって上述の３次元とそれぞれ対応づけられるように思われる。また新垣・都築（2009）は、24対の性格特性語のSD尺度を用いた因子分析により「手書き文字を評価する際の認知次元」として「勤勉性」「友好性」「自信」の３次元を見出している。これらは手書き文字を手がかりとした書き手に関する評価的な認知の次元であるが、これもまた本研究で抽出された手書き文字自体の感性印象の３次元や対人認知の基本３次元と対応づけることが可能であると思われる。

この類同性は、手書き文字を認知する際に対人認知につながる感性印象が尖鋭化されていった結果とも解釈できるが、手書き文字を認知する際に筆跡自体を擬人的な存在として捉えて対人的な認知様式を働かせていることの表われである可能性も示唆される。どちらにしても、筆跡から受ける感性印象が、意味的に対応する対人認知次元での書き手の特性の認知をもたらし、さらにその特性と関連する他のパーソナリティ特性の認知にも影響を及ぼすことが考えられる。

手書き文字の感性印象からの書き手のパーソナリティ特性の推測

ビッグファイブ理論に基づきパーソナリティを包括的に捉える主要５特性について筆跡から書き手の性格を想像させたところ、５つの特性すべてにおいて手書き文字の感性印象と中程度以上の相関がみられ、手書き文字の感性印象と結びついて書き手のパーソナリティ特性の多岐にわたる認知が行なわれることが示された。すなわち、筆跡の文字が「均一に整って読みやすい」と書き手は「計画的で勤勉」「温和で親切」と認知され、「丸くてかわいい字」だと書き手は「温和で親切」「話好きで社交的」と認知され、「のびのびとした大きい字」だと書き手は「話好きで社交的」「進歩的で想像力に富む」「くよくよせずマイペース」と認知されていたことが相関から読み取れる。一

般の人々が、筆跡の特徴の感性的印象に基づいて書き手のパーソナリティ特性を認知する「素朴筆跡学」的推測の存在とその具体的内容が確認されたと言えよう。

それでは、このような結びつきはいかにして生じたのであろうか。一つの可能性としては、パーソナリティ特性の個人差から書字行動の違いを経て手書き文字の形態的特徴が生まれる因果的説明理論を人々が持っているためとする説明がありうる。この因果関係を逆にたどることによって、手書き文字の感性印象から書き手のパーソナリティ特性を推論したことになる。

しかし、以上の結果は手書き文字の感性印象次元の考察において述べた意味的な類似性によっても説明可能である。King & Koehler (2000) は、筆跡学的な信念が根強く浸透している背景要因として、筆跡の特徴を記述する尺度の形容語と書き手のパーソナリティ特性の形容語とが意味的な連想関係にあることを指摘している。手書き文字の感性印象次元が対人認知の基本次元やビッグファイブのパーソナリティ特性と意味的に類似しているならば、筆跡の感性印象から喚起された情緒的意味の活性化は情緒的意味において類似したパーソナリティ特性の活性化をもたらすことになる。このような推測は、その活性化を書き手のパーソナリティに関する認知結果であると解釈する、連想と特性帰属のプロセスによって生じていると考えられる。

筆跡からのパーソナリティ認知の誤謬性

書き手の実際のパーソナリティ特性の査定結果と照らし合わせると、手書き文字の感性印象と「筆跡から想像される性格」の各パーソナリティ特性との間に見られた相関は事実としての根拠が確認できなかった上、そのほとんどが感性印象とパーソナリティ特性との「実際」の相関から逸脱して認知されたものであったことが明らかになった。

本研究で確認された手書き文字の感性印象と筆跡から推測された書き手のパーソナリティ特性との結びつきは、、帰属における基本的錯誤（Ross, 1977）や対応バイアス（Jones, 1979; Gibert & Malone, 1995）と同様、他者の性格や態度などの内的特性を知りたいという強すぎる関心をわれわれ人間が持っている（外山, 2001）ことを背景とする誤謬性を持つと考えられ、他者と関連づけられうる手がかり情報から他者の内的特性に関する情報をできるかぎり引き出そうとする傾向性から生じた錯誤的認知の帰結であると解釈される。

また、筆跡から推測された書き手のパーソナリティ特性の個人差は、同じ特性における書き手の実際の個人差とほとんど一致しないものであり、また実際のパーソナリティ特性の違いから生じた筆跡の変動が別のパーソナリティ特性における個人差として解釈される可能性も示唆された。一般の人が行なう筆跡からのパーソナリティ特性の推測は、プロセスが誤謬的であるだけでなく結果にも妥当性を欠いており、信用性の低いものであると言うことができよう。

残された問題

この論文では本研究において見出された結果に関していくつかの仮説的説明を与えているが、それらについてさまざまな角度から検証する実証的研究を行っていく必要がある。

例えば、意味的類似性に基づく連想と特性帰属に関しては、実験的な研究手法でプロセスに関する直接的な証拠によって検証可能であろう。また、手書き文字に限らず、さまざまな手がかりからの対人認知において同様な現象が確認できないかについても検討する必要がある。他者の活動の結果生じた産物そのものから受ける感性印象を、そのような産物が生じるに至った因果的説明理論の有無にかかわらず、われわれは感性印象と情緒的意味において類似した次元での他者の内的特性にダイレクトに帰属させる認知的習慣を持っている可能性がある。

また、本研究で示された筆跡印象と推測された書き手の性格との結びつきは 2 種類の測定結果間の共変関係にすぎないが、その内容が「字のきれいな人」や「丸文字で書く人」のようなカテゴリー化された認知を通じて定式化され、「血液型ステレオタイプ」（託摩・松井, 1985）に倣って「筆跡ステレオタイプ」とでも呼ぶべき「知識」として社会的に共有されていることも想定される。ステレオタイプ化の程度や具体的内容について改めて検討する必要があろう。

本研究においては、方法論上の必要性と調査サ

イズの制約から、調査Ⅰでの筆跡サンプルの採取対象者と調査Ⅱでの評定参加者を女性に限定したが、本研究で得られた知見が男性に関しても当てはまるかどうか検証する必要がある。筆跡の感性印象と書き手のパーソナリティ認知との結びつきの内容には性差がある可能性も想定されるが、そのような認知の発生機序や誤謬性については普遍妥当性を措定するものであるため、その点においても実証的な検討が必要である。

註

1）本論文は、昭和女子大学人間社会学部心理学科の平成20年度卒業生である小澤由起さんが著者の指導で行なった卒業論文研究「筆跡と性格との関連について」のデータを基に、分析を加えて執筆されたものである。

引用文献

新垣紀子・都築幸恵（2009）．人は手書き文字をどのような次元で認知しているのか？ 社会イノベーション研究，**4**(2)，27-44.

Brown, B.L., Strong, W. J., & Rencher, A.C. (1973). Perceptions of personality from speech: Effects of manipulations of acoustical parameters. *Journal of the Acoustical Society of America*, **54**, 29-35.

Bruner, J.S., & Tagiuri (1954). The perception of people. In G.Lindzey(Ed.), *Handbook of social psychology*, Vol.2, Reading. Cambridge, Mass: Addison-Wesley. pp.634-654.

Dazzi, C., & Pedrabissi, L. (2009). Graphology and personality: An empirical study on validity of handwriting analysis. *Psychological Reports*, **105**, 1255-1268.

Dean, G.A. (1992). The bottom line and effect size. In B.L.Beyerstein & D.F.Beyerstein (Eds.), *The write stuff: evaluations of graphology, the study of handwriting anallysis*. Buffalo, NY: Prometheus Books. pp.342-396

Furnham, A., Chamorro-Premuzic, T., Callahan, I. (2003). Does graphology predict personality and Intelligence? *Individual Difference Research*, **1**, 78-94.

Gilbert, D.T., & Malone, P.S. (1995). The correspondence bias. *Pschological Bulletine*, **117**, 21-38.

Hamid, S., & Loewenthal, K. (1996). Inferring gender from handwriting in Urdu and English. *The Journal of Social Psychology*, **136**, 778-782.

林　文俊（1978）．対人認知構造の基本次元についての一考察．名古屋大學教育學部紀要.教育心理学科，**25**, 233-247.

Jaensch, E. (1930). *Grundformen menschlichen Seins*. Oxford: Elsner.

Jones, E.E. (1979). The rocky road from acts to dispositions. *American Psychologist*, **34**, 107-117.

King, R.N., & Koehler, D.J. (2000). Illusory correlations in graphological inference. *Journal of Experimental Psychology: Applie*d, **6**, 336-348.

Kretschmer, E. (1921). *Koerperbau und Charakter: Untersuchungen zum Konstitutionsproblem und zur Lehre von den Temperamenten*. Berlin: Springer.

黒田正典（1980）．書の心理―筆跡心理学の発達と課題―．誠信書房.

槇田　仁（1983）．SCT筆跡による性格の診断．金子書房.

槇田　仁・小谷津孝明・伊藤隆一・渡辺利夫・平野　学（1981）．筆跡とパーソナリティの関係についての実証的研究（1）．慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要，**21**, 85-95.

西園　薫・無藤　隆（1993）．筆跡と書字意識と性格の間の相互の関連の検討．日本教育心理学会総会発表論文集，**35**, 505-505.

Ross, L. (1977). The intuitive psychologist and his shortcomings: Distortions in the attribution processes. In L.Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, Vol.10. New York: Academic Press. pp.173-200.

Shepherd, J.W. (1989). The face and social attribution. In A.W.Young &H.D.Ellis(Eds.) *Handbook of research on face processing*. Amsterdam: Elsevier Science Publishers. pp.289-320.

塩田由香・田中有希子・押木秀樹（1998）．書写指導の目標論的観点から見た筆跡と性格の関係について．書写書道教育研究，**12**, 40-47.

託摩武俊・松井　豊（1985）．血液型ステレオタイプについて．東京都立大学人文学部人文学報，**172**, 15-30.

外山みどり（2001）．社会的認知の普遍性と特殊性―態度帰属における対応バイアスを例として―．対人社会心理学研究，**1**, 17-24.

辻　平治郎（1998）．5因子性格検査の理論と実際―こころをはかる5つのものさし―．北大路書房.

Vine, I. (1974). Stereotypes in the judgement of personality from handwriting. *British Journal of Social & Clinical Psychology*, **13**, 61-64.

和田さゆり（1996）．性格特性用語を用いたBig Five尺度の作成．心理学研究，**67**, 61-67.

Warner, R.M., & Sugarman, D.B. (1986). Attributions of personality based on physical appearance, speech, and handwriting. *Journal of Personality and Social Psychology,* **50**, 792-799.

まつの　たかのり（昭和女子大学人間社会学部心理学科）